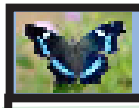

色彩教材研究会通信　No.458　2025.9.4

発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

● Color Impact 2025 に参加して

本年 6 月 15 日から 19 日にかけて、NY 州にある Rochester Institute of Technology（RIT）にて開催された、Inter-Society Color Council（ISCC）主催の Color Impact 2025 に参加し、口頭発表の機会を得た。

色彩科学の最新動向からデジタルメディアにおける色の応用まで、多岐にわたるテーマで研究報告が行われるとともに、ワークショップやポスター発表を通じて、世界中から集まった参加者との間で活発な意見交換がなされた。

会期最終日には、RIT 構内にある色彩科学の世界的拠点 Munsell Color Science Laboratory を訪れた。そこでは、研究者の方々から最先端の研究内容をご教示戴いただけでなく、自身の研究に対する示唆に富む助言も賜った。

さらに、かねてより探していた『The ISCC-NBS Method of Designating Colors and a Dictionary of Color Names』の公開を知り、先人たちが築き上げた歴史的記録を紐解く契機にもなる等、まさにかけがえのない経験であった。

（幹事：榎　芳栄）

●日本の伝統的な色名・利休鼠

江戸時代に「四十八茶百鼠」と呼ばれた多数の鼠色の色名が誕生する。

無彩色だけでなく、色味を含む灰色で、「粋好み」の江戸の人に愛された色のグループの誕生である。

その一つが茶人千利休の名を冠した薄茶の緑みを帯びた利休鼠という色である。

千利休（1522~1599）は、御茶湯御政道の第一人者として豊臣秀吉に仕え、最後に切腹を命ぜられるに至ったが、三千家として現代まで茶道家元として存続し、江戸には江戸千家流が川上不白を開祖として、普及し、利

いずれも薄茶の色にちなんで緑みを帯びた色である。利休鼠が現代に残ったわけは、北原白秋作詞・梁田貞作曲の「城ケ島の雨」（1919 年）にもよる。

「雨がふるふる城ヶ島の磯に
　利休鼠の雨がふる
　　雨は真珠か　夜明けの霧か
　　それとも私の忍び泣き」

今でも、海岸には、歌碑が立っている。

百鼠と言われた多数の色名は、日本人の美意識である「粋」、「侘び」、「寂」、「もののあわれ」などに通じる色彩意識として作用しているように思われる。

（永田泰弘）

●大辞典ひろい読み 89 ーこ

黒土：こくど。チェルノーゼム。黒色土。

黒陶：こくとう。中国新石器時代、竜山文化期に盛行した黒色土器。ろくろで成形し、表面を研磨して光沢を出したもの。

黒頭：こくとう。髪の毛の黒い頭。年の若い人。

黒肉：こくにく。黒色の印肉。くろにく。

黒白：こくはく。くろしろ。

黒髪：こくはつ。黒い髪の毛。くろかみ。

黒斑：こくはん。黒い斑点。

黒飯：こくはん。ナンテンの葉で黒く染めた飯。禅宗で四月八日の釈迦の降誕会に供える。

黒板：チョークで文字や図が書ける様に黒または緑の塗料を塗った板。

黒皮症：こくひしょう。顔面などの皮膚が色素沈着のために黒ずんで褐色や紫灰色などを呈する症状。

黒白：こくびゃく。黒い色と白い色。黒いものと白いもの。善と悪。正と邪。是と非。くろしろ。

黒表：こくひょう。要注意人物・危険人物の住所・氏名などを記した帳簿。ブラックリスト。

黒風：砂塵を巻き上げ、空を暗くするようなつむじ風。黒風白雨。

＊大辞泉：小学館発行国語辞典　（永田泰弘）